

# 崔鍾男氏のコメントに対する回答

橘川智昭（日本 東洋大学）

崔鍾男先生には雑駁な拙論に対し貴重な御意見を賜り、誠に有難うございました。本発表の論旨が見やすくなるよう、順序を多少入れ替えてお答えします。

1. 各章の題目は次の通りとしたい。
  1. はじめに
  2. 法相宗の理行二仏性説
  3. 理行二仏性説の背景
  4. 理行二仏性説の再検討
    - a. 法華玄賛と理仏性・行仏性
    - b. 慈恩基の四種声聞理解
    - c. 不愚法の意味
    - d. 五性各別説における不愚法
    - e. 五性各別説における理仏性の意義
  5. 一性皆成仏思想にみる理仏性と行仏性
  6. まとめ

8. 本発表の意図は中国的仏性観の特質を理行二仏性説を通して検討するものである。五性各別に立脚する立場であれ一性皆成仏に立脚する立場であれ理仏性と行仏性は連続する一体のものであり、巨視的にみれば理行二仏性の関係の構造は両立場でさほど変わらないものと思われる。特に五性各別の仏性観が語られる際、それを批判する側から眺めることによって、一部分の人だけが持つ本有無漏種子＝行仏性のみが取沙汰されるが、それについては修正を求めたい。とかく五性各別の理行二仏性説というと、衆生における行仏性の有無という、空間的な（非時間的な）説明で済まされがちであるが、そうではなく、時間的な幅の中で理想的な形で向上していくという動的

主体的な側面と、その人の本来的な側面、すなわち仏ともともと一緒だったという自覚の側面とについて、いかにそれらを一つのもとと捉えるかという課題こそ五性各別であれ理行二仏性説には貫かれている。種性差別による成仏の可否は無論重大な関心事として目立ちやすいが、ただ“五性の全ては善なるもの”という価値をもちこむことにより五性各別教理の意味がみえてくる。行仏性を持たない点で唯一の例外のようにもみえる無性有情にせよ、仏教として見捨てられた者ではなく人天乗のことであり、仏が悪趣に落ちないように常に見守って善趣に救済して引き上げ、世間的善行を続けていくことのできる者である。声聞・縁覚にしても同様に仏に救われた身である。重要な点は、仏との一体性に気づかず仏に疑念を抱く存在か、仏と一つであるという自覚をもって生きるかという相違であり、その転換の部分に求められるものが一乗の教えであり、仏性の教理問題ということになると思われる。また円測についていうと、本発表で示した慈恩基の思想の見直しにより、円測と基が等しい路線にあることが知られるはずである。円測については拙稿「唐初期唯識思想における〈大乘〉の把握 — 種性説との関わりから —」（本稿注 10）、同「密意と未了義 — 唯識思想を中心として —」（『仏教学』49、2007年）等を参照されたい。（なお、4も以上と大きく関連するが、現在考察中の事柄が種々あり、後日改めて論じることとしたい。）

2. 基の『枢要』は、『涅槃経』は理性と及び行性の中の少分の一切とに拠って説くと述べる。一切衆生悉有仏性の教えなどはすべての者が有する理仏性の観点であろう。行性の中の少分の一切というのは、基は具体的に語っていないので明確ではないが、私の考えとしては、声聞・縁覚も劣った仏性として行仏性をもつといいうるために菩薩種性を有する者に限定して、皆当に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと説かれる部分にあてているように思われる。また『仏地経論』にみえる『涅槃経』理解（本稿第3章）に由来している可能性も考えられる。『仏地経論』では一切衆生に遍満する理仏性は真如法身仏性と表現されるが、それは四智を成就する所依としての清浄法界の意であり、五性中の不定種性のところに『涅槃経』の理解が収斂されている。なお『法華経』について少分一切と関係するのは、方便品の「無二亦無三」の解釈が代表であろう。これは第二乗＝縁覚乗も無ければ第三乗＝声聞乗も無しという、つまり未だ菩薩乗に入っていない不定種性の声聞には廻心向大させ、既に大乘に歩んでいる不定種性の菩薩には小乗に退転しないように保持することであり、こうした理解も少分一切である。少分一切という理解の仕方はとかくクローズアップされるが、基がおそらく

第一段階的にうけとめたむしろ出発点であって、それを超えて基自身が五性各別に則りつつ、五性全体にわたる一乗・仏性教理に拡げていることを今回発表したわけであり、そこに中国的特質を見るところである。

3. 本稿註 36 を参照されたい。

7. 本稿の文がやや誤解を招きやすいものであったために補足する。一切衆生に共通に存在する真如が根拠となって現実のあり方を肯定的に捉えようとする場合、根源的な一つの本質を根拠に現実を本質の部分に引き寄せて現実を一つのものとして肯定するか、あるいは根源的な一つの本質を根拠に現実の多様性をそのまま肯定するかという相違が、一性皆成仏思想と唯識思想との間にあることを指摘した訳であるが、ただ中国固有思想の多様な思惟形態からすれば、この程度の相違はヴァリエーションの範囲に収まるレベルではないかということである。本稿はその意味で検討の余地があると述べたのであり、仏教対中国思想という図式で中国思想から仏教に影響を及ぼしたという意味ではない。

6. 日本において唯識宗という言葉は新訳系の唯識教学を示すものとして概ね問題なく用いられるが、今回は一言説明が必要だったと反省している。日本で法相宗という言葉が登場するのは8世紀の終わり位からであり、そもそも自称ではなく他称として始まったといわれる（吉津宜英「法相宗」という宗名の再検討」（『渡邊隆生教授還暦記念仏教思想文化史論叢』、1997年）。相という言葉にしても、どうしても華嚴系などにおける相宗対性宗の対比の議論が想起されやすく、思想内容的にもそれに引きずられた先入観が生まれやすい。基自身が使う応理円実宗という言葉もなじまないであろう。特に崔先生の提言では西明学派との相違を明確にしたい配慮があると思われるが、それもまた基系と円測系統とを別流として整理すべきという見解がもちこまれたものといえる。私としては、当時は学派として括るよりも、一人一人が自由な思想を考え語ることが許されていたとみるべきであり、また円測の思想は新訳系の唯識教学という点で慈恩基などと根本の部分で全く等しいものと考えており、むしろ両者を総合したい見通しのもとに今回特に唯識宗という言葉を用いた次第である。

5. 理行二仏性説の一般通念を紹介することが成立背景を論じるより先に行うべきと私は考える。西明学派については上記（論評6と8への回答）を参照されたい。